

マッサージでできること 37 ～症例を参考に～

【 休みがちだったデイサービスへ休まず行けるようになりました 】

Tさん(80代・女性)は、40代で関節リウマチと診断され、闘病歴の長い方です。マッサージの施術を開始した当初から車椅子での生活であり、日中はベッド上で休んでいる時間も多かった状況でした。主訴は、手や足の関節のこわばりや痛み、頸肩背部のこわばりや張り感など多彩で、病気の特徴上、特に朝がお辛く、症状が強い日は気持ちも下向きになり、デイサービスも休みがちでした。

Tさんは、以前から身体の辛さを強く訴えていたため、担当ケアマネジャーの方からご相談を受け、主治医の先生からもマッサージの同意が得られました。

2017年初めからご自宅への訪問マッサージを週に2回の頻度で開始し、主治医の先生からは施術の強度(とくに頸部への施術)に注意をするように指示がありました。私たちの施術は、どの患者さんにおいても、体調や病状に配慮し、毎回の施術も強度や時間など、細心の注意を払いながら、優しく・丁寧な施術に臨んでいます。Tさんにおいては、心身の調子や関節の変形などを考慮し、柔らかく・無理のないような施術を継続しました。また、Tさんやご家族、担当ケアマネジャーと話し合い、特に朝の早い時間帯に訪問し、施術することにしました。施術中には、身体の痛みなどの他に、日頃の不安やお悩みなどをなるべく吐き出していただくように、傾聴しながらの施術を心掛けました。

施術後には、愁訴の軽減がみられることが多く、毎回喜んでいただけましたが、梅雨の時期や冬の寒い時期には愁訴が増悪したり、デイサービスのお休みが続くこともあり、ご家族の方も心配しておられました。しかしながら、マッサージの施術を継続していき、1年が経った頃から、辛さの程度が少しずつ軽減したり、デイサービスをお休みする頻度が減ってきたようで、お休みしない月があったり、続いたりという変化が現れ始めました。

現在も症状には波がありますが、ご本人は少しずつ自信がついてきたようで、ご家族もとても喜んでおられました。

よく弱音を吐いていたTさんですが、最近は「娘に迷惑をかけないようになるべく行きたいと思っていたんだよ。」と、誇らしげに話してくださっています。(こぼり治療院・神林)



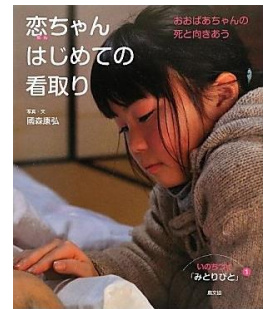
こんな本を読みました

【 死との向き合い方～ACPの前に 】

『恋ちゃんはじめての看取り—おおばあちゃんの死と向きあう』
(國森康弘:写真・文、農山漁村文化協会)

本書は写真絵本です。小学5年生の恋ちゃんが、曾祖母の竹子さん(92歳)との別れを描いたものです。

生きとし生けるものは、いつか必ず死が訪れます。また、一度死ぬともう生き返ることは出来ません。



当たり前のことですが、現代人は死に直面した経験がないため、その確実なことが不確かなものとして感じられているそうです。

絵本なので細かいことは描かれていませんが、普段から仲の良かったおおばあちゃんとの思い出や最後の別れから、恋ちゃんは、「人は死んでも心の中で生きている」感想を持ったそうです。

昨今は、アドバンス・ケア・プランニング(ACP)として「何かあった時にいかに備えるか？」を事前に伝えておくことが推奨されています。しかしそれ以上に、「自分がいつか死ぬ時にどんな“旅立ち”を迎えたいか？大切な人たちがいつか亡くなる時に、どんなふうに見送ってあげられるか？」を、普段から考え、話し合うのが大事だと思います。悲しいことではありますが、とても大切な準備です。本書は、そうした話を行うきっかけづくりにできるかもしれません。

(草の根・小池)

最後までお読みいただき、ありがとうございます。
当会や在宅医療マッサージについて、
ご興味・ご関心をお持ち頂きましたら幸いです。

◆ 訪問医療マッサージを考える会つば

つば市内での在宅における訪問医療マッサージの現状を少しでも改善させ、利用者やその家族に喜ばれるよう、市内のマッサージ師(鍼灸師も含む)の有志で2015年に結成しました。(2018年10月現在、マッサージ師8名、鍼灸師8名所属)

事務局・発行元:こぼり治療院

☎ 029-869-9979

◆ ホームページ随時更新中!

<http://medical-massage-at-home.com>

